# 種社会の単位集団から原初の人間社会のバンド（居住集団）と家族への進化

丹　野　　正

**要旨：**

今西錦司は、生物のそれぞれの種ごとに、「種個体」たちから成る「種社会」が存在すると提唱した。多くの生物（動物）の種社会は、個体維持能力と種属維持能力を兼ね備えた種個体たちから直接に構成されているだけで、種社会の内部に複数の種個体たちから成る持続的な集団（群れ）を形成していない。彼は野生ニホンザルの種社会の中に社会的単位としての群れの存在を認めたが、ニホンザルの群れのメンバー構成が非常に安定しており、群れ間は対立していることが明らかになるにつれて、無意識のうちにその「群れ」と「種社会」とを重ね合わせてしまい、群れはそれ自身で個体の再生産を果たしている閉鎖的で自己充足的な集団であると見なしてしまった。

その後、ニホンザルの群れは、雌は生まれ育った群れにとどまるが、雄は生まれ育った群れを離脱して他の群れに移籍する、「半閉鎖系」であることが明らかになった。伊谷純一郎はこのことおよび他の霊長類の群れも閉鎖系ではないことを重視し、群れを霊長類の種社会を構成している「単位集団」と位置づけた。ただし彼は、単位集団間の雄または雌の移籍を、インセストの回避機構なのだと解釈した。しかし、種社会が単独生活の種個体たちからではなく、単位集団から構成されている場合、単位集団間に種個体のなんらかの交流ルートが存在すること、すなわち単位集団なるものは通世代的な閉鎖系でありえないことは、種社会論からの論理的帰結であり、この事実は「種社会の実在」を証明する発見だったのであって、インセストの回避機構と解釈すべきものではない。

ヒトの祖先の種社会も最近縁のチンパンジーと同様の単位集団（雌が集団間を移籍する）から成っていたとすれば、こうした種に固有の単位集団から原初の人間社会の居住集団と家族への転換は、血縁関係の相互認知の持続とそれに基づくインセストの自然な回避が他集団に移籍した血縁者にも及ぶようになり、集団間に拡張された親子関係と兄弟姉妹関係のネットワークを頼って女性のみでなく男性も集団間を移動し得るようになって、はじめて実現したのだと考えられる。この意味で「インセストの禁止」は人間社会のすべてに普遍的な制度なのではなく、原初の人間社会の起原よりもずっと後の時代に、「制度上の血縁者たち」とその集団を創出する原理として、そして複数の出自集団・クランから成る「部族」というまさに「制度に基づいた社会」を編成する原理として、打ち立てられたものである。

**キーワード：**種社会と種個体、単位集団、原初の人間社会、居住集団と家族の起原

# Evolution from the *unit-group of specia*（species society）to the band and family in primitive human society

Tadashi TANNO

**Abstract：**

Kinji Imanishi insisted on the existence of *specia*（species society）that consists of *specion*（individuals of same species）in each species. Many of these *specia* do not have continuous groups consisting of several individuals, but are composed directly of individuals which have both the ability of sustaining individuals and preserving species. Though he noticed the existence of troops as social units in the *specia* of the Japanese monkey, and while it was clarified

that the membership in the troop was very stable and troops are antagonistic toward each other, he regarded the troop in the same light as *specia*, and misunderstood the troop as a closed and self-sufficing group that reproduced individuals of the next generation within itself.

Afterward, it was clarified up that the Japanese monkey troop was "semi-closed", as females remain in the troop in which they were born and were raised, whereas males leave their birth troop and enter into another troop. Jun-ichirou Itani attached much importance to this fact and that other primate troops are also not closed. He then defined the troop as the *unit-group* of which primates' *specia* is composed. But then he interpreted male or female transfer among unit-groups as the mechanism of incest avoidance. However, in cases where the *specia* is not composed of independently living *specion* but of unit-groups, it is the logical conclusion from *specia-theory* that there should be some kind of *specion* transfer route among unit-groups; namely, the unit-group cannot be closed through generations. The clarification of this fact was the attestation of the actual existence of the *specia* (species society), and therefore should not be considered directly in relation to incest avoidance.

Let us think of the case of the *specia* of our ancestors which had probably been composed of *unit-groups* similar to those of chimpanzees (female transfer among *unit-groups*). Conversion from such *unit-groups* inherent in the species to the band and families of primitive human society would not have come to be until the continuance of mutual kinship recognition and the natural incest avoidance based on this reached to separate kin individuals who had moved to other groups, so that not only females but also males became able to move among groups depending on the parent-child and brother-sister relations spread beyond the group. In this sense, *incest-taboo* has not been a universal rule laid down by all human societies, but was laid down in far later ages than primitive human society, as a rule to create the kin in a system and to organize a systematic society, *tribe*, composed of some kin-groups, *clans*.

**Key word**：*Specia* and *Specion*, *Unit-group*, Primitive human society, Origin of band and family

## １．はじめに

今西錦司（1902～1992）は、生物のそれぞれの種ごとに「種社会」が存在すると主張した。人間以外の動物にも社会を認め、動物の社会を調べて「社会進化論」や「比較社会学」を論じた研究者は、彼以前にも欧米にはいた。今西自身が『人間以前の社会』（1951）で彼らの研究を紹介している。今西は彼らの社会観を二つに区分する。一方は高等な動物には人間社会的なものが認められるから、サルなどにも社会を認めてやれという立場である。他方はエスピナスのように社会はどんな生物にも認められなければならない、あるいは社会性というのは生物における一つの属性でなければならないという一種の汎社会学説である。しかし彼は、この二つの社会観はかならずしも対立したものではなく、双方の考えの根底には擬人的なまたは人間本位的なものがあり、一方はその適用範囲を限定しようとし、他方はそれを拡大しようとしただけであって、両方ともまだ本当の比較社会学の立場に立っていない、と批判する。そして次のように言う。「われわれはどうしてもここで一度、こうした人間のにおいのする社会観をはなれて、その上に比較社会が正しく打ちたてられてゆくような、厳密に生物学主義的な、客観主義の社会観を樹立せねばならない」（今西、1951、『増補版　今西錦司全集』（以下では『全集』と略記する）五、57）。

今西はのちに、自身の「社会生物学」について次のように述べている。「私の社会生物学には二つの方向がある。一つは地理的方向づけであり、もう一つは歴史的方向づけといってよいであろ

う。‥‥それとは別個に、私はまた種間（interspecies）社会学と種内（intraspecies）社会学とを、区別しようとしていた。この立場からだと、さきにのべた二つの方向は、地理的方向づけだろうと歴史的方向づけだろうと、いずれも種間社会学にはいってしまう」（今西、1966、『全集』五、313）。そして、彼独自の進化論も含めて一般に「今西錦司の種社会論」といえば、この「種間社会学」つまり種社会間の共時的・通時的な関係についての一連の考察を指している。しかし、私は本稿では、もう一方の「種内社会学」という面での彼の研究と「種社会論」との関連性を検討したい。

彼の「種内社会学」的研究の代表例は、野生ニホンザルの研究に始まる1950～60年代の霊長類社会の研究であり、人間家族の起原についての考察である。彼はそれ以前に「種社会論」を確立していた。「その上に比較社会が正しく打ちたてられてゆくような、厳密に生物学主義的な、客観主義の社会観」すなわち彼の「種社会論」は、彼自身の霊長類社会の研究のなかでどのような経緯をたどったのか。これを最初に検討しよう。

## ２．今西の「種社会」論

『人間以前の社会』（1951）で彼は、「種社会」を概略以下のように規定している（『全集』五、57-59）。

生物学主義の立場からいえば、種社会とは、簡単にいうなら、同種類の生物の個体がその働きあいをとおして成りたたせている、一つの生活のオーガニゼーションである。

個体とはたんなる個体ではなくて、それは一個の生物として、自活しうる能力（単独生活能力）と同時に繁殖にたずさわりうる能力をもそなえたもの、つまり一つの身体に個体維持能力も種族維持能力も兼ね備えたものでなければならない。

次に同種の個体の働きあいとは、個体同士のあいだに見られるあらゆる関係が含まれる。たんなる認めあいからはじまってコムペティションもコオパレーションもすべてが働きあいである。

最後に、こうした働きあいをとおして成りたつオーガニゼーションであるが、働きあいに違いがあればそれに応じてこのオーガニゼーションにも違いが生じてくるであろう。だから、働きあいが個体を分散させる方向にはたらく場合と集中させる方向にはたらく場合とで、まったくその構成状態のちがう社会が現れてくる。しかし、有性生殖をいとなむ生物であれば分散といってもそこには限度があり、分散のなかにも集中があって、どんな生物でも分散というのは一定の分布地域内での分散にすぎない。

ここまでは、一つの身体に個体維持能力も種族維持能力も兼ね備えたものとしての「種個体」たちと、それら種個体間の働きあいをとおして成りたっている「種社会」についての説明である。ただし、一方の個別の種個体たちと、他方の全体としての種社会の間には、種によってはなんらかの中間的な構造が存在しうる。彼以前に動物に社会を認めた欧米の研究者たちは、ミツバチやアリなどのいわゆる社会性昆虫に見られる一つの巣のなかの個体間の分業に着目していた。今西が種個体とは一つの身体に個体維持能力と種族維持能力の双方を兼ね備えたものでなければならないと強調したのは、彼らの見解を批判するためであって、彼の種個体の定義にもとづけば、女王バチと働きバチなどは見た目にはそれぞれ個体であるが、それらは種個体ではない。それらの個体が一緒になって二つの能力を発揮することが可能になるのであって、女王バチと働きバチの総体が超個体的な種個体をなしているのである。ゆえに、一つの巣のミツバチやアリたちはけっして一つの社会をなしているのではない、というのである（同上、92以下）。

## ３．『人間以前の社会』（1951）でのサルの群れから人間の家族への検討

彼は本書でハチなどの昆虫をはじめさまざまな動物の種社会を比較検討している。ただし彼はこの当時から人間の社会と家族の起原に迫ろうとしていたので、むしろ「トリやケモノ」に見られる種個体と種社会のあいだの中間的な構造に着目して論を進めようとした。彼は1940年代後半に最初に都井岬の半野生馬の調査に着手し、1948年からは野生のニホンザルの調査をも始めていた。後者の野外調査を実際に担ったのは彼の学生や大学院生たちである。彼は本書で、彼自身と彼らの調査研究の指針となるべき理論を構築しようとしていた。彼以前の研究者たちが同種の個体たちの「集中（あるいは集団）＝社会、あるいは集中現象＝社会現象という前提にたっていた」ことを批判して、今西は最初に、同種個体たちの「集中だけが社会現象ではない」ことを強調している（同上、59以下）。

そして鳥類や哺乳類についても、平素は集中しないで単独で生活しているものがある一方で、平素から集中した生活をしているものもある、と言ったうえで、次のように指摘する。「しかし、ここでも一つ注意しておきたいことがある。それは、昆虫などとちがって、トリ・ケモノ――とくにケモノ――では、われわれの調べている都井岬の半野生馬のように、同じウマであっても、集中した生活をするものもあり、しないものもある、ということである。すなわちかれらの集中には、本能的・生理的なもの以外に、選択的・心理的なものがある」（同上、111）。同様のことを、昆虫やサカナなどに見られる一時的な集中（群集）と対比しながら、彼は以下のようにも強調している。

> しかるに、トリ・ケモノになると、たんに自他の識別だけでなくて、それぞれの個体が――そのにおいのちがい、あるいはその他のちがいによって――識別されるようになる。そうでなかったら、かれらの群れに、順位制というようなことの、成りたつはずがないからである。むしろかれらの群れというのは、最初から、こうした相互間の個別的な識別のうえに成立した、仲間関係（companionship）である。だからそれは、アリの場合とちがって、まったく見ずしらずのもの同士のあいだにでも、成りたつ可能性のある、個体間のすぐれて心理的な社会関係である。したがって、群れは、一般下級動物にみられる群集の、たんなる延長ではない。‥‥
>
> トリ・ケモノのような、心理作用の発達した高級動物の社会にいたって、はじめてはっきりと認められるようになる、群れ生活というものは、いいかえたならば、長い進化の道程の最後に近づいて、ようやく実現したところの、動物の、いわば社交的ともいえる社会生活である。群れにはテリトリーがあるが、それはその成員たちにすれば、共同の、あるいは共有の、生活の場であって、かれらはその中で、お互いにいっしょに食物を求め、いっしょに眠り、外部からの撹乱がないかぎり、われわれからみれば、まことに平和にくらしているようにも見える。しかし、群れの成員は、いつでもその資格として、ひとりで生活できる能力をそなえていなければならぬ、ということは、たびたび指摘しておいたところであるが、もしこの群れの中に、だれかが世話してやらねばならない病気のものとか、子供とかができたらどうなるであろうか。　（同上、113-14）

つまり、トリ・ケモノとくにケモノの段階で見られる、個々の種個体たちと全体としての種社会とのあいだに存在する中間的構造としての「群れ」、および「群れ生活」というものは、それぞれの種に固有の本能的・生理的なものではなく、当の種個体たちが加入や離脱を選択して形成している、すぐれて心理的な社会関係なのだ、と彼は考えたのである。これは明らかに、「われわれの調べている都井岬の半野生馬のように、同じウマであっても、集中した生活をするものもあり、しないものもある」という事実をもとにした「群れ」の捉え方であった。野生ニホンザルの群れの構造は、調査に着手して間がないこの時点では、森の中を追いながらサルたちを一瞬垣間見ることができるだけで、まだほとんど不明という状態だった。そして今西のこのような「群れ」の捉え方は、その数年後にようやくわかったニホンザルの群れの共時的構造と、さらにその十年以上後に判明した群

れの通時的構造を、どう理解すべきなのかという問題に大きく影響し、とくに後者についての今西の考え方と、彼の後継者となった伊谷純一郎の考え方の大きな違いを生むことになるのである。このことについては後述する。

上掲の引用文で今西が最後にあげている問題については、サルの仲間は子ザルが生まれたときから手足で母ザルにしがみつくことができ、母ザルは子ザルと一緒に群れと移動をともにすることができる。そこで彼は次のように想定した。「‥‥とにかくサルの親子――ウマの親子でもカンガルーの親子でもそうであるが――は、群れをはなれてでも生活できるのである。それをはなれないで、群れ生活一本に徹底したところに、親子関係という縦の関係よりも、仲間関係という横の関係のほうに、重みのかかってきた証拠がある。仲間関係を基礎づける、個体と個体との心理的な結びつきというのも、はじめはたんに、お互いの安全感を満足さすだけのものであったかもしらぬが、やがてはそれが心理的常態となって、個体本位の生活が、群れ本位の生活におちつくのである」（同上、117）。

今西は動物の群れ――群れ生活――をこのようにとらえ、哺乳類とくにサルにいたって群れ生活が完成したとみなし、群れ生活こそが霊長類社会の系統進化における基本形だと考えたのである。既述のようにニホンザルの野外調査は始まったばかりだったので、本書では、彼は戦前のカーペンターによるクモザル、ホエザルおよびテナガザルの野外調査の成果に基づいて、サルの群れから人間の家族と家族集団の形成にいたるまでの過程を考察した。彼は、ホエザルの群れのような複雄複雌の大きな群れをもっとも原型的な群れと位置づけた。そしてクモザルのような、複雄複雌の群れの内部に単雄数雌から成るグループが形成されている状況を中間段階として、やがてこうした群れが分解してそれぞれのグループが独立するという過程を経て、テナガザルのような雌雄1頭ずつから成る小さな群れへと進化したのであろうと推測した。つまり「サルの群れの発展は群れの崩壊である」と考えたのである（同上、118-20）。

ただし彼は、テナガザルのような雌雄のペアとその子供から成る持続的小集団を、これはいまだ家族ではなく、あくまで群れの段階にあるのだと注意する。そして彼は、人間家族の直前の段階にあったこの群れの雌雄――これらはいまだ単独生活能力を備えている――のうちの雌が、子持ちの時期にある危機に陥って単独生活能力を維持できなくなるという状況を想定したうえで、こうした雌を雄が助ける行動をとおして雌雄間の分業と協力が行なわれるようになり、これが「すなわち人間的な、家計的家族の成立にほかならない」、と考えた（同上、130）。

その一方で彼は、次のようにも推測している。「たとえサルの群れを人間の家族に改編することによって、その家族が孤独に放りだされるものであったとしても、人間はそのままで、孤独のままでおったのではなく、今度はそういう家族と家族とが、相より相集まることによって、もう一度家族を単位にした群れに、その社会を再編成していったのではなかろうか。そうすることによって、孤独化の恐怖からまぬがれたのではなかろうか」（同上、131）。とはいうものの、彼はこの時点ではまだ、この再編成がどのような経緯を経て達成されたのかについてはイメージすることができなかったようである。ともあれ今西は、人間社会への進化としての「サルの社会の発展は、やはり群れの崩壊であり、その縮小化である」（同上、136）と考え、その縮小化した群れが上述のような危機を経て家族に切り換わり、その後、それらの家族から成る新たな集団――狩猟採集民のバンド（居住集団）のような「家族集団」――が形成されたと想定した。この基本的な考え方は、彼のその後の論考にも引き継がれていく。

## ４．「人間以前と人間以後」（1952）――サルの群れ間での通婚という予測

この論文は、そのサブタイトルのとおり、「アーサー・キース卿の『人類進化についての新説』

について」論じたものである。とくにキースの「グループ・セオリー」を紹介したうえで、今西はそれを批判し、自らの説を展開している。今西によればキースは、人間になったばかりの人間がつくっていた社会は、ローカルな小さなグループがそれぞれのテリトリーを守って生活していて、グループどうしは互いにテリトリーを守ることによって対立していたと考えた。そして、今西はここまでのキースの考えに、「すくなくとも、人間以前の社会から見とおすならば、人間の最初の社会は、そうであるよりほかないのである」（今西、1952、『全集』五、185）と同意したうえで、次のように続ける。「しかしかれは、進化論者として、これだけのことに満足していない。このグループとグループとは、どこまでも対立して、交わらないと考える。そうすればそれは、一つ一つのグループが隔離されているのにもひとしい。隔離されているかぎり、その小グループ内での繁殖には、いわゆる血族結婚 inbreeding がおこなわれるに相違ない。そうすればライト（Sewall Wright）効果によって、進化が促進されるというところに、かれは結びつけようとしたのである」（同上、185-6）。

これに対して今西は、「しかるに、われわれの集めつつある事実は、そう注文どおりには行っていないのである」と言い、テリトリーといいうるようなものが認められる場合でもそれがかならずしも厳守されない例として、彼が当時調査していた都井岬のウマでの事例や、「また幸島のサルでは、去年はたしかに二つのグループにわかれて、別々のテリトリーにすんでいたものが、今年（1951）は一つになり、それとともに、そのテリトリーも合併されて一つになっているところを、見ているのである」という事例をあげる（同上、187）。

そして彼は、キースの説の要点を次のようにまとめている。「もともとダーウィンの後継者をもって任ずる著者のいわんとするところは、グループ内の団結が強くて、しかも他のグループに対する敵愾心や闘争心の強いものが、けっきょくそうでないものを打ちやぶって、生きのこってゆくという、進化論にあった。そしてそのための隔離であり、インブリーディングであり、グループ・セレクションであり、またグループ・セオリーでもあったのである」（同上、190）。そのうえで彼は、キースのグループ・セオリーが要求するような隔離やインブリーディングが、人間以前の段階のそして初期の人間のグループ間に実際に貫徹していたのか否かを問い、今西自身の考えを以下のように述べている。

> そこでいったんサルにまで戻ったらどうなるか。たとえばニホンザルは、鹿児島県から青森県まで分布しているが、幸島のサルも高崎山のサルもかれらと同じ種類のサルが、そのような分布をしていることを知らない。かれらにとっては、かれらの生活するグループの生活以外のことを、知る必要はないのである。それにもかかわらずニホンザルというサルが日本にすむようになったとすれば、それは、その一つ一つのグループが隔離されていたためではなくて、日本が地理的に隔離されていたためであり、その中においては、たとえグループにわかれて生活していようとも、通婚がおこなわれ、したがって長年月のあいだには、その隔離地内におけるインブリーディングの結果として、どこにでも同じサルが見られるようになったのである。
>
> 人間がサルから由来したことを認めるかぎり、人間になるまえのサルも、やはりニホンザルと同じように、長いあいだの隔離とインブリーディングの結果、ある地域内に同質的な種として分布していたことであろう。（同上、192）

この記述からわかるように、今西はこの時点では、彼の持論である「種社会論」をもとに、ニホンザルの「種社会」なるものを明瞭に意識していた。共時的にはそれぞれの群れがテリトリーをもって互いに対立しているとしても、種個体の再生産において通時的に隔離されているという意味でのインブリーディングの単位は、個々の群れではなく、全体としての種社会なのであって、＜だから、群れ間に通婚がおこなわれているはずだ＞、と彼は推測したのである。これは彼の「種社会論」か

らの理論上の要請であり、予測でもあった。というのは、今西がこの論文原稿を書いていた1951年当時は、個体識別に基づくニホンザルの群れの内部構造はいまだ把握できておらず、ましてや通時的に個体が群れ間を移動するのか否かといったことは、その後20年近くを経てようやく判明するに至るという状態であったからである。

しかし、その後の今西は、ニホンザルの群れの内部構造が明確になってくるにつれて、「ニホンザルの種社会」全体を踏まえての検討・考察という視点が薄らいでいったようであり、上記の予測（仮説）は彼自身もさほど強く意識したものではなかったのか、忘れられてしまったようである。

## 5.「人間家族の起原」（1961）に至るまでの考えの変容

既述のように、今西が野生ニホンザルの研究に着手したのは1948年からである。実際の調査活動は伊谷純一郎たちが担当した。これは、ニホンザルという一つの種社会の「種内社会学」的研究であり、かれらは群れをつくって生活していることから、多数の種個体から成る群れの通時的な内部構造を把握することを、はじめから目指していた。野生ニホンザルの群れを森の中で追跡しつづけ、個体識別に基づいてその内部構造を解明する作業は、何年間にもわたる困難な調査を必要とした。しかもニホンザルはオトナになるまでの成長過程が長く、寿命も20～30年と長い。幸島（1952年８月）と高崎山（1953年２月）の群れの餌づけの成功によって、個体識別と各個体の行動の観察がようやく可能になり、群れの内部構造の把握は急速に進展した。そして、群れは何年にもわたって持続する安定した構成をもつことも判明した。しかも、これら初期の調査対象となった群れは、孤立群であった。

複数の群れが隣接して存在する地域でも、餌づけと個体識別による群れの長期継続調査が進展し、その結果、群れは相互に対立しあっていて、群れのメンバー構成はやはり安定していることが明らかになった。こうした研究の進展につれて、今西は、無意識のうちにニホンザルの「群れ」とその「種社会」とを重ね合わせてしまったようである。しかもこのことに、彼はもうこの時期にはなんの違和感もなかったらしい。1958年の論文「生物社会と人間社会」の以下の文章は、このことを端的に語っている。

> サルの中でもいちばん人間に近い、類人猿の社会については、まだよくわかっていないところがあるので、われわれに比較的よくわかっている、ニホンザルの社会を例にとろう。ニホンザルの群れにも、大きい群れから小さな群れまであるが、群れはそれ自身で、個体の再生産という仕事をはたすことによって、種社会の仕事を代行している、一つの社会単位である。もちろん、これだけなら、原型的なばらばら生活者の社会だって、地域的に再生産の単位となっているポピュレーションがあり、回遊魚の群れのごときも、やはりこのような再生産にあずかる、一つの単位である、といえないわけではないだろう。しかし、ニホンザルの群れを、こうしたものから鮮やかにわかつのは、およそつぎのようなことがらである。いままでの、原型的なばらばら生活者の社会では、社会はあっても、個体が前面に出て、社会はその影にかくれている、といった印象を、受けやすかった。しかるに、ニホンザルの群れにまでなると、もう社会は個体の影にかくれてはいない。それは、群れを構成している個体が、もはやいままでのように、個体本位の行動に終始していることが許されなくなって、そのうえにあらたに、群れ本意の行動をとらねばならなくなってきている、ということである。（『全集』五、219-20）

今西の種社会論によれば、すでに見たように、通時的に捉えた種個体の再生産の場は全体としての種社会であるか、あるいは種社会になぞらえることができるほどの、地理的に隔離された大きな

地域個体群であるはずであった。ところが今西は、ニホンザルの群れの内部構造が明確になるにつれて、上記のように「群れはそれ自身で、個体の再生産という仕事をはたすことによって、種社会の仕事を代行している、一つの社会単位である」と、つまり群れを種社会のミニチュアとしての「ニホンザルの社会」と考えるようになっていったのである。

彼は、群れ内の若者オスが成長につれてなにかしら群れのための仕事をし、やがては群れのリーダーの役目を果たすことになるであろうこと、しかもこうした群れ本位の行動の大部分は、群れの中に生まれてからのちに習いおぼえたものだと考えられることから、群れ本位の行動にははじめから群れが前提されているという。そして、「個体の再生産のために群れがあるというよりも、いまではむしろ、群れのために、その存続のために、個体の再生産がおこなわれているのだ、といったほうがよいかもしれぬ」（同上、220）、という見解にいたっている。

そして、翌1959年の論文「社会と個体・社会進化と個体進化」では、昆虫やサカナがつくる集団について、「そういった集まり――それは普通には、成虫ばかりの集まり、あるいは幼虫ばかりの集まり、といったように、生活形を等しくするものの集まりだが――は、どれをとっても甲乙のないspecion（種個体）の、一時的な、無組織な集まりであり、crowdであるにすぎない。社会進化という立場からみれば、それは第一段階のspecia（種社会）に現われた、一つのフェーズにすぎない」と述べたうえで、次のように続けている。

> しかるに、ある種のトリ・ケモノの群れになると、ここにはじめて、組織づけられた集まりというものが見られるようになる。組織づけられているというのは、その集まりをつくるspecionの間に順位が認められたり、リーダーが存在したりすることを、いうのである。一つの群れの中の組織づけばかりでなく、そうした群れの存在が、同時にそのテリトリーや、勢力関係をとおして、群れの外にあるもののあり方まで、制約するようになる。specionの中には、群れをつくらないで、あるいは群れを離脱して、単独で生活しているものがあってもかまわない。しかし、こうした単独生活者だって、もはや、群れの存在を無視して、勝手気ままにふるまうわけにはゆかなくなる。
>
> （今西、1959、『全集』五、247）

> 今西の観察したウマの群れは、血縁集団といっても、♀ばかりからできていた。川村は奈良公園のシカを調べて、♀は大きくなっても群れに残るが、♂は群れをはなれて、♂集団に転籍することを確かめた。だから、これらの群れはいずれも、まだ自足的な繁殖単位というところまでは、発展し、完成していないoikia（複数の種個体から成る種社会の持続的構成単位、丹野注）である。そして、われわれはその完成をニホンザルの群れに見いだすのであるが、おもしろいことに、この場合でも、お乳をのましてもらった母ザルのところに居残るのは、♀の子だけであって、♂の子は母親をはなれて外へ出てゆく。しかし、群れの外へ出てゆくのでなく、群れの中心部から周辺部へ、位置を移すだけである。（同上、250）

このようにして、ニホンザルの群れは自足的な繁殖単位であって、メンバーは群れ内で再生産されているのだ、というのが今西たちの共通理解となったのである。

## ６．「人間家族の起原」（1961）

今西は、上述した『人間以前の社会』（1951）での人間家族の起原論をさらにおし進めて、1961年に「人間家族の起原――プライマトロジーの立場から――」を発表した。プライマトロジーの立場からのアプローチとは、現存のいろいろなサルを調べてサルの社会の進化の方向を探り出し、そ

れを人間になる直前の段階にあるサルにまでエクストラポレートすることである。そのためのモデルとして、前著でのテナガザルの小さな群れに替え、この論文では当時ようやくわかりかけてきたゴリラの群れおよび群れ間関係を挿入して考察している。と同時に、もう一方の人間の側からの接近も必要だと言い、この挟み撃ちによってどこでサルが人間にかわった（進化した）かを押さえようとする。そのために、いかにプリミティブであってもこれだけがそろっていたら、もはや人間家族と認めてさしつかえないという最小限度の条件を、彼は「文化人類学のほうから」しぼり出した。それは次の四つが存在することである。①インセスト・タブー、②エクソガミー、③コミュニティ、④配偶者間の分業（今西、1961、『全集』五、259-60）。

1961年までにはニホンザルの群れの研究はかなり進展していたが、これについては前著（1951）でのホエザルの群れと同様に、サルの群れの原型としての大きな群れと位置づけていたようである。彼はこの論文でも基本的に、原型としての大きな群れから小さな群れへの崩壊過程を経て、1頭の雄と数頭の雌とその子供たちから成るゴリラの群れのようなファミロイド（類家族）が形成されるとともに、テリトリーを解消しているファミロイド間の親和的な関係に基づいて、コミュニティが形成されるに至ったと推定する。他方、配偶者間の分業については前著と同様に、直立二足歩行後の子持ちの女性が陥った「危機」を想定し、それへの対応として定着したと推測している。

上記の①と②の条件については、彼は以下のようなプライマトロジカル・アプローチを行っている。1961年のこの論文では、ニホンザルの群れのなかで周辺落ちしていた若オスの一部がついには「群れ落ち」してしまうという事実にも言及し、「群れ落ちしたサルは行方のわからぬものが多い。しかし少数のものは、別の群れに受け入れられたことがわかっている」（同上、268）、とも記している。しかし、この時点では彼は、多くのオスは周辺落ちでとどまって、群れ落ちまでゆくオスは少数派だとみなしていたようである。そして、周辺落ちでとどまる場合と群れ落ちまでゆく場合があるのはどうしてかについては、まだよくわかっていないとしたうえで、これらの事実をインセストの回避とメイトアウト（mate out）という問題との関連で考察し、次のように述べている。

> 母息子間のincestがおこなわれないということと、オスが母親のもとをはなれて、周辺落ちないしは群れ落ちすることとは、もともとはまったく別な理由にもとづくものと思われる。しかし群れ落ちというところまでくれば、これはもうその理由のいかんを問わず、mate outでなければならない。一方に群れ落ちということが用意されている以上は、incest をさけてmate outすることも可能である。われわれはニホンザルやアカゲザルのような、人間からはるかに遠いサルの階段において、すでに人間社会における制度としてのincest taboo やexogamyに先行する、萌芽的現象をつかんだ。しかもそれはSlaterの提出した説よりも、はるかに説得的である。なぜならかれの説は、mate out を取りあげただけで、incestのほうは完全に手放しにしているからである。
>
> （同上、271）

ゴリラは多くの場合１頭の雄と数頭の雌とその子供たちから成る群れを形成しており、この雄と雌たちとの間には安定した結びつきが成立している。雄の子供は成長すると群れから離脱してソリタリーとなり、やがて他の群れの若い雌を誘い出してペアとなり、その後も同様にして数頭の雌を獲得する。群れの遊動域は近隣の群れのそれらとかなり重複しており、群れ間に敵対関係は見られず、ときには出会った群れどうしが一緒になることさえあることから、隣接する群れは近隣関係で結ばれているらしい。今西は1961年のこの論文で、このようなゴリラの群れを、いまだ群れともいえるし家族と呼ぶこともできる、またはもはや群れではなくいまだ家族ではない中間段階という意味で、“familioid”と呼ぶこととした（同上、304）。この“familioid”は、その後の伊谷その他の論文等では「ファミロイド」と記されるようになり、『全集』五の事項索引でも「ファミロイド（familoid）」となっているので、本稿でもこれをファミロイドと記すことにする。

かつては一般に、動物（とくに哺乳類）の複雄複雌の持続的な群れは、それらが互いに対立している場合には、閉鎖系であることが当然視されていた。人類社会の起源を考察した人類学者や社会学者やフロイトは、人類の祖先は小集団を形成して生活していたと考え、しかもそれらは互いに敵対しあっていたと推測した。そしてこのようなそれぞれの小集団は、とうぜん閉鎖的集団であらざるをえず、集団内部でメンバーの再生産をくりかえしていた、つまり通世代的なエンドガミーとインセストの状態が、人類の祖先たちの原初的状態だったと想定し、こうした状態からいかにして人間の家族と社会が出現するに至ったのかを、あれこれと想像してきた。だからこそ、人間の家族や集団のみがなぜ・どのようにして閉鎖系ではなくなったのか、というように問題を設定したのである。そしてそれを、恒常的なインセストの状態からなぜ・どのようにしてわれわれの祖先はインセストを回避し禁止するに至ったのか、という問題と表裏一体であると考えたのである。

今西はこの論文で、これらの諸説を批判的に検討している。ただしこの論文では、既述のようにニホンザルの雄の群れ落ちについて言及してはいるが、大部分の雄は生まれ育った群れにとどまるのだという前提にたっていた。そこで彼は、当時ようやく垣間見えてきたゴリラのファミロイドの構成と、それらが出会ったときの状況をもとに、ファミロイド間には親和的な近隣関係が形成されていると推測し、それをもとに、人間以前の大型類人猿の段階ですでにインセストは回避され、エクソガミーがおこなわれているのだと考えたのである。

彼にとって人間社会の起源を問うことは、「人間社会は家族を社会単位として構成されている」ことから、人間家族の起源を問うことであった。だからそのために、サルの群れの発展は群れの崩壊であると考え、かならずしも一夫一婦の形態とは限らないが、家族類似の小集団つまりファミロイドを類人猿段階に求め、さらにこれらファミロイドが相互に近隣関係で結ばれ、一つのコミュニティすなわち地域社会を形成しているという状況を追い求めたのである。そのためには、ファミロイドはテリトリーを解消していなければならなかった。それによりファミロイド間で若い個体の移動が可能になってインセストは回避され、エクソガミーが確立し、配偶関係が形成されるとともにアダルトリー（姦通）も回避されるにいたる、と彼は考えたのである。そしてこうしたファミロイドから人間家族への変身を決定づける第４の条件として設定したのが、配偶関係にある男女間での分業すなわち労働の分担による生計の一体化であった。

## ７．「日本人による霊長類の野外研究」（1970）での家族論の検討について

さらに、「その二〇年間の回顧と将来への展望」というサブタイトルのこの論文では、何年もの努力の末に輪郭が明らかになったチンパンジーの大きな群れこそが、彼らの社会の社会的単位であり、遊動域が重複する単位集団間には個体の行き来が可能であるらしいと推測して、同様の仮説をたてた。そして次のように述べている。

> このことは、いくつかのこうした大きな群れが近隣関係をとおして、結びあわされ、グドウのいう地域社会をつくっているのではないか、ということを示唆する。そしてこの点は、ニホンザルはじめ多くの霊長類にみられるように、たとえ二つの群れが隣接していても、お互いにその遊動圏を守り、たとえ群れ落ちしたハナレザルをとおして相互になんらかの交流がおこなわれているにせよ、原則的には排他的、対立的な関係のうえに成りたった社会と、いちじるしくちがうところである。いいかえるならば、ニホンザルの群れなどは、それ自身が一つの社会単位であると同時に、内婚による一つの繁殖単位であると見なしうるが、チンパンジーの大きな群れは、一つの社会単位ではあっても、それ自身がかならずしも一つの独立した繁殖単位でなく、繁殖単位はむしろ近隣関係で結ばれた、いくつかの群れにまたがる一つの地域社会であるのかもしれない。

（今西、1970、『全集』七、225-6）

このように彼はこの時点でも、ニホンザルなどの群れはテリトリーを守って互いに対立しているのだから、「たとえ群れ落ちしたハナレザルをとおして相互になんらかの交流がおこなわれているにせよ」、群れはその種社会の「一つの社会単位であると同時に、内婚による一つの繁殖単位」すなわち閉鎖系だとみなしている。この後半の部分は、＜群れは種社会の社会単位であるにもかかわらず、その一つ一つが閉鎖系である＞と言い換えるならば、その矛盾は明確になる。そうすれば前半の部分も、＜種社会の社会単位であるニホンザルなどの群れは、たとえテリトリーを守って互いに対立しているにせよ、群れ落ちしたハナレザルをとおして群れ間で雄の種個体の交流を保っているのだ＞、と言い換えることになろう。だが、今西は1970年のこの時点でも、自説の矛盾に気づいていない。

なお今西は、「人間家族の起源」(1961)では「コミュニティ」を、近隣関係で結ばれたいくつかのファミロイドを内に含む規模のものとして、つまりサル社会の原型である崩壊以前の大きな群れに相当する程度のものとして想定していたが、この1970年の論文では、それを以下のように修正している。

外婚を支障なくつづけてゆくためには、通婚圏としてある程度の大きさをもった地域社会の存在が、前提条件となってくる。ワシュバーンとランカスターは、このためには、すくなくとも五〇〇人の人口を擁する地域社会が必要だと考えている。原始狩猟採集生活者のつくる一つのバンドが、五〇人から成立しているとすれば、こうしたバンドを一〇集めたものが一つの通婚圏であり、一つの地域社会であるということになるであろう。そうすればこれは、われわれの考えている類人猿の地域社会よりも、かなり大きな地域社会であるだろう。（同上、227）

また、この時点までには明確な輪郭をもつチンパンジーの大きな群れすなわち単位集団の存在が確かめられていたが、この集団内にはファミロイド的な構成のサブグループは認められず、１頭の発情した雌に数頭の雄がつぎつぎに交尾することが確認された。さらに、この当時は単位集団の中に若い雄が見当たらなかったことから、チンパンジーの若い雄も群れ落ちするのだろうと伊谷たちは推定していた。そこで、今西はこの論文では、「インセスト・タブーについて、われわれはニホンザル・テナガザル・ゴリラ・チンパンジーの社会で観察され、または推定されている若オスの群れ落ちと関係づけようと考えているが、まだ理論化はできていない」（同上、227）と認め、次のようにこれまでの見解に修正を加えている。

しかしインセストが社会的タブーとして認められるようになるためには、大脳がある程度まで発達する必要があったであろうから、かりに多かれ少なかれその前駆的あるいは萌芽的現象が、人間以外の霊長類にも認められ、したがって原始人類にも存在したであろうことを推定することが許されたにしても、オーストラロピテクス *Australopithecus* の社会にすでにインセスト・タブーが存在していたと断言しうる根拠はない。おそらくホモ（Homo）の段階まで、その成立の時期をおくらせたほうが安全でなかろうか。

したがって、インセスト・タブーとそれに関連した三特徴を条件とするかぎり、家族といえるものは、類人猿はもとより、原始人類にもまた、これを認めるわけにはゆかない、ということになるのである。（同上、228）

## ８．ニホンザルの群れは閉鎖系か否か

ここまで、今西錦司の1951年から70年にいたるまでの霊長類社会の研究と、それに基づく人間社会および人間家族の起源についての考察の経緯を、かなり詳しく追跡しながら検討してきた。この間に彼は、伊谷たちの調査によってニホンザルの群れの内部構造が解明されて以降は、「群れはそれ自身で、個体の再生産という仕事をはたすことによって、種社会の仕事を代行している、一つの社会単位である」（今西、1958、『全集』五、219）と考えるようになり、ニホンザルの群れは内婚による一つの繁殖単位であり、閉鎖系なのだと見なすにいたった。

この点について、伊谷純一郎は1970年にこの当時を回想しながら、次のように述べている。「野生ニホンザルがもっている『群れ』という社会単位は、研究の初期には、安定した閉鎖系であると考えられた。ところがそれは半閉鎖系であり、群れの輪郭はいわば半透膜のようなものであって、‥‥」（伊谷、1970、『伊谷純一郎著作集』（以下では『著作集』と記す）三、19）。さらに1975年には、『増補版　今西錦司全集』第七巻の「解題」（1974年執筆）のなかで、以下のように詳述している。

> つぎに述べることは、この理論（今西のアイデンティフィケーション・セオリーをさす:丹野）にとってより重要な問題をはらんでいる。それは私たちのニホンザル研究史に深いかかわりがある。というのは、研究を開始した当初から一九六〇年代の半ばまで、ということになるとこの理論が完成した時期は、この期間に入ってしまうことになるわけであるが、私たちはニホンザルの群れは一つの閉鎖系であると考えていた。これに対する反省があらわれ始めたのは、従来非社会的と考えられていたヒトリザルのオスが群れに入ったという資料が少しずつ報告されはじめ、そして今西さんも「アイデンティフィケーション」やのちの「社会における個体」のところどころに書いておられるように、群れを離脱するオスが数多く記録されるようになった頃である。こうして西田君によるヒトリザルのオスの再考察を目的とした研究を経て、ニホンザルの群れは母系であって、メスにとってはたしかに閉鎖的な社会単位だが、オスにとっては出入り可能な輪郭をもったものだというふうに、考え方を改めなければならなくなった。そして、一九七〇年に至って、ほとんどすべてのオスは自からが生まれ育った群れを離脱するというしっかりとした資料が、各地で集められるに至ったのである。
>
> これは、今西さんが以前から主張されてきた長期観察の貴重な成果の一つなのだが、群れに対する認識の転換によって生じてくる一番大きな問題は、オスのライフ・ヒストリーについての考え方を根本的に改めなければならなくなった点である。すなわち、一つの群れの中で生まれ、やがて中心部から周縁部に移る。ここまではよいのだがそのあと、群れを閉鎖系と考えるならば、その若いオスたちは周縁部で生長し、ふたたび中心部のメンバーとして戻って来なければならない。ところが、群れは半閉鎖系であってほとんどすべてのオスが群れを離れるとするならば、周縁落ちしたオスはさらに群れ落ちし、ヒトリザルとして放浪生活を続けたのちにどこかの群れに入るということになる。
>
> 今西さんのアイデンティフィケーション・セオリーは、前者の立ち場に立っているのである。今西さんも「アイデンティフィケーション」のあとがきの一番最後の注の中でオスの離脱の現象にふれ、つぎのように書いておられる。「せっかく身につけた群れカルチュアが、そこではもはやなんの役にもたたないと思われる、ヒトリザルの道を選んだということが、私にはどうも腑におちかねるのである。」　（伊谷、1975、『著作集』三、215-6）

そして伊谷は、当時の今西の疑問に対して、その数ページ後に1974年の時点での自らの見解を次のように述べている。

私は、ほとんどのオスが群れを出るということになったとしても、今西さんのアイデンティフィケーション・セオリーが崩れるものだとは思っていない。‥‥　彼らは未成熟期に、自分が生まれ育った群れで、母やそしてその群れの主だったオスから植え込まれたものを、立派に他の群れの中での生活に生かしてゆくにちがいない。「もはやなんの役にもたたない」のではなく、種社会の維持や、種の均一化という見地からすれば、それであってよいのではなかろうか。

（同上、217-8）

伊谷はこのように、群れは閉鎖系ではないという事実を深刻に受けとめた。他方の今西は、彼自身の種社会論に論理的に矛盾するはずの＜ニホンザルの群れ＝閉鎖系＞という考えを、新事実に照らして再考することなく、保ちつづけようとしたのである。彼も後に群れは閉鎖系ではないという事実を受け入れることになるのだが、それでもなお彼がこだわったのは、群れを出入りするのはなぜ雄だけに限られるのか、雌が出入りしているというケースもあるのではないかということだった（今西、1976、『全集』十二、369-401）。彼は、ニホンザル（や他の霊長類）の群れは母系であり、群れ間を移籍するのは雄のみであるという伊谷（1972、『著作集』三）の指摘を、群れという社会構造が種によって本能的に定まっているかのように法則化する生物学主義に陥っていると批判し、群れの社会構造と群れ間の個体の移籍を、種に固定したものではなくむしろ群れの伝統の問題としてとらえるべきだと主張した。他方伊谷は、個体の移籍も含めた群れの構造は、個々の種のみでなく属や科といった系統のレベルで共通性が見られるほどの安定性をもっていることの方を重視したのである。

ニホンザル以外にも多くの霊長類が群れをつくって生活しており、哺乳類のさまざまな種も群れ生活をとっていることが、現在では知られている。群れといってもその大小や構成は多様であるが、ここではニホンザルのような構成の群れをその代表例として考える。群れは、複雄複雌で、アカンボからオトナまたは老年個体までのすべての世代を含み、繁殖活動は一見群れ内部の雄・雌間で行われている。群れの構成メンバーは一見安定しており、群れはテリトリーを有し、群れどうしは対立関係にある。群れが個別のテリトリーをもたずに遊動している場合にも、群れは互いに避けあい、出会えば闘争が起こるという意味で、やはり対立しているとしよう。群れの大きさは数10頭から100頭の範囲とする。こうした群れが、ニホンザルに限らず哺乳類のどの種の群れとしても、「それ自身で、個体の再生産という仕事をはたすことによって、種社会の仕事を代行している」という意味で通世代的な閉鎖系でありうるのか否か。このことは、群れとは当の種個体たち自身が種社会の内部に中間構造として形成しているものであるからには、本来いかなる構造特性をそなえているのかという大きな問題である。しかもこのことは、われわれ人類の祖先が形成していたであろう集団にも、初期人類の居住集団にも共通する問題である。そして、ニホンザル研究が解明した事実は、群れはけっして閉鎖系ではないということであった。

## ９．種社会論からの論理的帰結：群れは閉鎖系ではありえない

多くの文化・社会人類学者たちが従来いだき続けてきた、人間の社会と家族の起源についての通説は、本稿の12頁に上述した。問題設定が間違っていれば、正解は得られない。人類はいかに特殊な存在であろうと、初期の人類もそして人類の直前の祖先も、動物であり哺乳類であることに変わりはない。真の問題は、人間であろうとなかろうと、複雄複雌の通世代的に持続する集団をつくって生きる哺乳類において、その集団は閉鎖系でありうるのか、それともありえないのか、である。そして、本来であれば、すでに「種社会論」を提唱していた今西自身がこのように問いを設定してしかるべきだった、と私には思われる。本稿の冒頭で引用したように、彼の種社会論は、「一度、

こうした人間のにおいのする社会観をはなれて、その上に比較社会が正しく打ちたてられてゆくような、厳密に生物学主義的な客観主義の社会観を樹立」するための理論であったはずだからである。しかも彼は、本稿の8-9頁で述べたように、ニホンザルの調査が着手された最初期の1952年の時点では、キースのグループ・セオリーを批判した際に、自らの種社会論をもとにニホンザルの群れ間に「通婚がおこなわれ」ているであろうと述べていたのだから。

群れは一方では種社会内部の構成単位でありながら、他方ではそれらの群れが互いに独立にかつ閉鎖的に種個体の再生産を担っているのだとすれば、「種」ないし「種社会」とは、個々の個体たちや群れを観察者・研究者が分類学的な類似性の基準に基づいて一括りにしただけの、唯名論的な存在にすぎず、実在しないまぼろしのようなものとなってしまう。そしてこれは、今西自身が否定し、拒否し続けた「種」の定義であったはずである。ところがその今西自身が、彼の「種社会論」に矛盾する見解を抱いてしまったのである。そして彼はその後もこの矛盾に気づかなかったようである。

ニホンザルの群れは、ニホンザルという同一種の個体たちから成る種社会のあくまで一構成単位であるにすぎない。論理的には逆なのであって、「種社会論」に基づくならば、種社会の内部の「社会単位」は通世代的にはけっして閉鎖系ではありえない、ということが導かれるのである。そしてこのことは、種社会の「社会単位」は共時的には閉鎖系であっても、他方で通世代的には、それらの間に種個体の交通・交流のルートが存在する、ということを意味する。

以上のことはもちろん、現在からの＜あと知恵＞によるものである。しかし、ニホンザルの群れは閉鎖系ではないという事実の発見は、群れをその「社会単位」として包含する今西の提唱した「種社会」が実在すること、相互に対立している「単位集団」間にあってさえも種個体の交流通路が存在し、その動的なプロセスをつうじてそれぞれの集団の種個体たちが均一に維持されながら、全体としての種社会も存続していくことを実証するものだったのである。理論とはそれから論理的に導き出される仮説が観察や実験によって実証されるものだとすれば、今西の少なくとも「種内社会学」の領域における「種社会論」は、このような意味でまさに「種」の通時的な構造についての生物学的理論だったのであって、一生物学者個人の風変わりな自然観や生物世界観にとどまるものではけっしてなかったのである。

## 10.「種社会」と伊谷の「単位集団」

ニホンザルの群れはじつは閉鎖系ではなく、雌は生まれ育った群れにとどまるのに対し雄は群れ間を移籍する、半閉鎖系だということが明確になったのは、伊谷が述べているように1970年に至ってのことであった。これは長年の継続調査の末に明らかになった重要な事実だったが、それだけにとどまらず、動物社会学ひいては人類学はこの事実をその理論の根幹にどのように位置づけるべきなのかというさらに大きな問題をも提起する、画期的な意味を持つ事実解明だった。

上述したように、伊谷は今西とは対照的に、この事実を深刻に受けとめた。ニホンザルの雄が生まれ育った群れを離脱し、ヒトリザルとしての放浪生活ののちに別の群れに接近して、出自を異にした群れに入るという行動をとることの意味を、伊谷は1970年の「霊長類の近親交配回避機構」と題した論文でつぎのように解釈している。

> それでは、こういったオスたちは、どうして自らが生まれ育ち一定の社会的地位まで占めるに至っていた群れを捨ててしまうのだろうか。だが、その動機や、そういったサルの意識を問うことは至難のことだといわなければならない。擬人的解釈を除くならば、結果論的ではあるが、つぎのような解釈が許されるであろう。
>
> このようなオスたちは、群れを出ることによって、近親者とくに自分の母親および姉妹との交

配の機会を断絶することになる。放浪ののちに別の群れに入ったこのようなオスは、おそらくその新しい群れでもこの群れ出身のオスの離脱がおこっているであろうから、そういった空席をふさぐことになる。そして、少なくともこのオスが生ませた最初の娘が性的性熟に達するまでの約四年間は、彼が父・娘の近親交配をおかす可能性は全くないと考えてよい。

（伊谷、1970、『著作集』三、19-20）

彼はこの論文では、父・娘の交配の可能性が生じてくる時期に至ると、雄が群れを再び離脱し移籍するのか否かはわからないと記している。また、特定の群れあるいは自分の生まれた群れの中で10年またはそれ以上優位な地位を占めつづけた雄の例も多数知られており、「おそらくこういったオスは、意識的であると無意識的であるとを問わず、その長い年月の間に、相当に濃度の高い近親交配をおかしていると考えなければならない」と推測している。さらに、群れにとどまり続ける雄は母親との交尾を回避していることも、この時点ではすでにわかっていたのだが、このことについて伊谷は次のように述べている。

しかし、もしこのような心理的な働きだけが近親交配の回避のよりどころになっているのであるならば、ニホンザルの社会ではそういった認知のありえない父と娘の関係は、安全弁をもたないことになる。このように考えてくると、群れの母体すなわちメスたちとの、オスの離脱による断絶は、もっとも効果的な近親交配回避の安全弁であるといわなければならない。（同上、20）

ただし彼は、この点についてはのちに、個体間の相互認知に基づく心理的な要因も、近親交配回避の機構としてともに重要であると認めている（伊谷、1983、『著作集』三、229）。ともあれ、この論文ではニホンザルのほかに、ハヌマンラングールの単雄群やペア型のテナガザルの集団、およびようやく輪郭がわかりかけてきたゴリラとチンパンジーの集団についても、近親交配回避の機構という観点からの検討を試みた。そして彼はこれ以降一貫して、霊長類の「単位集団」とその通時的構造の比較検討を、近親交配（インセスト）の回避機構という観点から展開していった。そして、その集大成が、1984年のハックスリー記念講演である。インセストの問題はのちほどあらためてとりあげるとして、ここでは、今西の「種社会」論と伊谷の「単位集団」論の関係を検討する。

すでにみたように、伊谷もニホンザル調査の初期段階では今西と同様に群れは閉鎖系であると考えていたのだが、1970年には群れは雄がその間を移籍する半閉鎖系なのだということを確信するに至った。またその間に、彼は一方でゴリラの調査ののちにはチンパンジーの調査を継続しながら、他方で霊長類各種の社会に関する文献研究を行い、上述の論文の２年後に『霊長類の社会構造』（1972）を出版した。この間に彼は、群れは「種社会」の内部構造であり、「種社会を構成している単位」であるととらえるようになった。1972年以降、彼がそれまでの「群れ」に替えて「単位集団」という術語を意識的に用いるようになったことが、このことを示している。ただし、1972年の『霊長類の社会構造』では、「群れ」と「単位集団」を併用しており、単位集団の定義づけに相当する文章も見られない。それまでは、ようやくその存在が確認されるに至った、チンパンジーの安定したメンバー構成からなる大型の集団に対してのみ、「単位集団」（unit group）という語を用いていた。それをこの著書では他の霊長類の持続的な群れにも拡張して用いるようになったのである。そして翌1973年の論文では、「単位集団」をつぎのように明快に規定し、それ以降、彼は「群れ」に替えて「単位集団」に統一したのである。

野生霊長類の研究は、一九五〇年代から盛んになり、今日では各系統群に属する五〇余種について豊富な資料が得られ、霊長目の社会構造の系譜をほぼたどることができるまでになった。そういった考察の中から、いくつかの重要な結論を引き出すことができる。

まず、原始的な原猿類の中には、夜行性で単独生活をしている種が少なくないが、昼行性のものは必ずそれぞれの種に固有の単位集団をもっている。そして、真猿類に属する種は、今日までに知られているかぎりでは、のちに述べるただ一つの例外を除いて、すべてが単位集団をもっている。すなわち、霊長類は、その進化の過程において、単独の生活から集団の生活へと移行していったのである。

この単位集団には、二つの系統を見出すことができる。より細かい特徴に目を向ければ、かれらは種ごとに多彩な変異を見せるであろう。しかし、それぞれの種社会の基本的な構造に着目するならば、それは結局はたった二つの系統に集約することができるのである。

（伊谷、1973、2-3、傍点は丹野）

「たった二つの系統」とは、一つはペア型であり、他方は単雄あるいは複雄で複雌の群れ型である。

つぎにこの二つの型は、霊長目の中の系統群と見事な相関を示している。もっとも、少数の例外がありはするが、これは分類の方に今後検討すべき点が残されているか、それとも野外観察の方に誤りがあるかのいずれかであろう。オナガザル上科、すなわち旧世界のサルは、ことごとく群れ型の単位集団をもっている。そして、ヒトニザル上科は、ペア型の系譜を引く系統群なのである。

霊長類の単位集団は、いずれも閉じられた集団ではない。すでに述べたように、二つの型はそれぞれの基本的な方式に基づいて、その単位集団の外の、自らと同じ形式をもった他の単位集団や、その種社会を構成するもう一つの要素である単独行動者との交流を保っている。この内と外という区分は、当然雌雄間の交配の規制につながる。

今日までの長期にわたる観察によって、同じ集団に属する、血縁的に深い関係にある異性間に、互いに性関係を避ける傾向があることが認められている。しかし、そういった心理的な傾向以上に、同質遺伝子の結合の回避に決定的な効果をもっているのは、ある単位集団の成員であった個体が、その集団の外に出てしまうという機構である。両性からなる単位集団の形成は、近親者間の性関係に実に見事なけじめを生んだのである。霊長類のいくつかの種の社会は、おそらく、インセスト・タブーをもつ人類よりも、はるかに完璧にインセストを回避しているにちがいない。

（伊谷、同上、3-4）

伊谷はこのように、昼行性の霊長類は必ずそれぞれの種に固有の単位集団をもっていること、しかも、それぞれの種社会の基本的な構造に着目すると、単位集団のタイプはペア型と群れ型という二つのタイプに集約されること、そしてこの二つの型は霊長目の中の系統群と見事な相関を示すこと、を指摘する。この最後の点については、「少数の例外がありはするが、これは分類の方に今後検討すべき点が残されているか、それとも野外観察の方に誤りがあるかのいずれかであろう」とまで言い切って、彼の確信のほどを示している。

彼はさらに、霊長類の単位集団はいずれも閉鎖系なのではなく、種社会の構成単位である他の単位集団と交流を保っているのだとも指摘した。そして、これを、それぞれの種社会がそなえているインセストの回避機構であると彼は解釈したのである。こうした伊谷の見解を今西は、すでに見たように、伊谷は生物学主義に陥っていると批判したのだった。

## 11. 単位集団間の種個体の移籍とその理由

上述のように伊谷は、霊長類各種の「種社会」の「単位集団」を、共時的構造とともに通時的構

造をも分析し、単位集団間に種個体の交流が存在していることを明らかにした。彼は、「単位集団」という用語を、こうした重要な事実を指し示す用語として採用したのだった。

単位集団をもたない種社会においては、オトナの種個体はすべて単独生活者である。雄と雌はある時期に出会って交尾し、雌は出産後の一定期間は子持ち生活者となるが、いずれ子は親離れして、単独生活者となる。

ペア型の単位集団をもつ種社会では、雌雄１頭ずつで持続的なペアを形成し、それぞれのペアが種個体を再生産するが、子がいずれ独立することは単独生活者の種社会と同様である。その後かれらもまたペアを形成する。

霊長類の種社会には見られないタイプの群れとして、ニホンジカなどは雌だけが群れをつくり、雄は単独生活をするか、または一時的な雄グループとして生活する。つまり雄の子はやがて独立し群れを離れるが、雌の子はオトナに成長したのちも群れにとどまり、その結果群れは雌だけの群れとなる。このような種社会は、母系でつながる雌だけでつくる単位集団と単独行動する雄の種個体たちから構成されていることになる。

群れ型の単位集団をもつ霊長類にあっては、群れはいずれも両性から成り、単雄群と複雄群の二つのタイプがある。そして単雄群はさらに二つのタイプに分けられる。一方のタイプは、母系でつながる雌たちの小集団にオスが１頭だけ加わっているタイプの群れである。群れで生まれ育った雄はやがて離脱するが、雌は群れにとどまりつづける。群れを離れた雄は単独行動をするか、またはテンポラリーな雄グループの一員となる。これらの雄は、機会を見て単雄群の雄を攻撃し、これを追い払ってみずからがその単雄群の雄となる。結果的には、どの単雄群の雄も数年ごとに交代していることになる。

単雄群のもう一方のタイプはゴリラの群れである。単雄群で生まれ育った雄はやがて独立し、単独行動者となるかテンポラリーな雄グループに加わる。成長した雌も単雄群を去るのだが、単独行動を経ずに、外部の雄に誘われるようにして離脱する。単独行動者であった雄はこのようにして雌とペアをつくり、その後も他の単雄群の若い雌を誘い出して、複数の雌からなる単雄群を形成する。したがって単雄群内のオトナ雌どうしにはほとんどの場合血縁関係はなく、この単位集団は当の雄一代かぎりしか存続しない。

複雄群の単位集団にも母系と父系という二つのタイプがある。母系の複雄群は、いくつかの母系の血縁関係でつながる雌たちの集団に何頭もの雄が加わって構成されている。雌は成長後も群れにとどまり、雄はすべて生まれ育った群れを離脱して、後日他の群れに入り込む。したがって、複雄群の中のオトナ雄は、基本的にすべて他の群れの出身者である。

複雄複雌の単位集団のもう一つのタイプは父系の集団で、チンパンジーとピグミーチンパンジー（ボノボ）だけに見られる。雄は成長後も生まれ育った集団に一生とどまり続け、雌は成長後に出身集団を去って、近隣の他の集団に入り込むのである。したがって単位集団内の雄はすべてこの集団の出自である。このような意味で、伊谷はこれを父系の単位集団と呼ぶことにしたのである。

このように、霊長類各種の単位集団はいずれも閉鎖系ではない。伊谷が霊長類のさまざまなタイプの集団をそれぞれの種社会の構成単位としての単位集団ととらえ直し、同時に単位集団は閉鎖系ではありえないことを打ち出した1972～73年には、チンパンジーの単位集団の共時的な構造は明確化していたが、その通時的構造はいまだ不明瞭であった。集団間の雌の移籍はそれまでに何例か見られていた。しかし単位集団内に若者雄がほとんど存在しないことから、チンパンジーも雄は出身集団を離脱し、より遠方の集団に入るのであろうと当時は推測していた。かれらの単位集団が上述のような父系の集団であることが明確になったのは、それからさらに数年後のことである。

伊谷は1972年の『霊長類の社会構造』の最後に、以下のように述べている。

社会人類学における社会構造の研究は、ヒト（*Homo sapiens*）という種内に見られる社会構造

の諸変異と、それら相互の間の系脈を明らかにすることを主題としてきた。それに対して、霊長類からのアプローチは、ヒトという種のもつ社会構造の特性の追及を主題にしており、それを、ヒト科の中に、さらにヒトニザル上科の中に、霊長類の中に、そして自然と時間の中にどう位置づけるかという課題を負わされているのだといってよい。まだ理論的基盤は薄弱なものにすぎないが、どうも霊長類の社会構造を動かしているそのシャフトは、インセストの回避機構であるように私には思えてならない。　（伊谷、1972、『著作集』三、162-3）

## 12. 単位集団間の個体の移籍はインセスト回避機構なのか？

以上のような伊谷とその研究グループによる長年の研究成果の集大成が、1984年の彼のハックスリー記念講演であり、それは『著作集』三に収録されている。「霊長類社会構造の進化」というタイトルのこの論文では、それまでの「単位集団」に替えて、新たに「基本的単位集団」（BSU）という名称を用いており、その特性をつぎのように列挙している。

霊長類の種社会に見られる基本的単位集団（basic social unit　以下BSUと略す）は、種社会ごとに固有の構造をもっている。それはいくつかの類型に分けうるのであるが、各類型間の構造上の違いにもかかわらず、つぎにのべるような特性を共有している。

（１）　BSUは両性によって構成され、その固有な構造は性的・非性的な期間を通じて維持される。

（２）　BSUは、種社会内の他のBSUおよび単独行動者に対して半閉鎖系を保つ。一つの種社会の成員のすべてはBSUに出自をもつが、そのすべてがBSUの成員として存在しているわけではない。しかしBSUの外にいる個体は、再びBSUの構成員になることを保証されている。

（３）　BSUは持続性をもち、その固有のサイズと構成をもつ機制をそなえている。

（４）　一つの種社会はひとつの型のBSUしかもっていない。重層の構造が見られる場合は、そのなかの一つがBSUで、その上位あるいは下位の単位はより新しいあるいはより発展的な構造である。

これに多少の補足を付け加えておきたい。BSUをもつ一つ一つの種社会は、多くの場合地縁性をもち、相互にある社会的距離を保って分散するBSUと、その空隙を彷徨する単独行動者あるいは単性の不安定な集まりとによって、模式的に示すことができる。もう一つ付け加えておきたいと思うのは、BSUの構造化とその持続性は、近親婚の回避の機構と深いかかわりをもっているということである。このようなBSUは、原猿類の種社会の四〇％と、オランウータンを除くすべての真猿類の種社会に相同的な存在として認めることができる。　（伊谷、『著作集』三、172-3）

両性の種個体からなる持続的集団をもつ各種の霊長類における、その種社会と単位集団および雌雄の種個体との構造的関係を、伊谷は以上のように把握した。本稿では、伊谷のBSUをこれまでどおり単位集団と呼ぶことにする。単位集団の構造はそれぞれの種に固有のものであるが、いずれもけっして閉鎖系ではなく、ペア型の単位集団やゴリラの単雄群では両性が生まれ育った集団を去るため、単位集団は一世代限りのものである。またその他のタイプの単位集団は、一方の性がとどまり他方の性は集団間を移籍するという意味ですべて半閉鎖系である。伊谷はこのような機構を、「擬人的解釈を除くならば、結果論的ではあるが、」とことわりながら、二ホンザルなどでは雄が、そして２種のチンパンジーにおいては雌が、単位集団を離脱することによって近親者との交配の機会を断絶することになるがゆえに、インセストの回避機構としてとらえたのである。そしてこの論文でも、「もう一つ付け加えておきたいと思うのは、BSUの構造化とその持続性は、近親婚の回避の機構と深いかかわりをもっているということである」、と付言している。

他方、今西は1987年の時点でも、このような伊谷の見解について次のように述べている。

このついでに一言いっておきたいのは、インセスト・アボイダンスであって、これがなにかの誤りで、ニホンザル社会における中心課題であるように見なされてきた。オスのワカモノザルの群れ落ちという現象と結びつけられて考えられているようである。‥‥‥　ワカモノザルの群れ落ちは、インセスト・アボイダンスとはまったく無関係な、いまのわれわれにはちょっと手のつけようのない問題である。（今西、1987、『全集』十三、415-6）

しかし、すでに述べたように、種社会の内部の持続的な単位集団は通世代的な閉鎖系ではありえないということ、そしてそれは何故なのかというその理由は、本来はインセストやその回避の問題とは独立に、種社会の存在形態、およびその内部構造としての単位集団相互間の通時的な関係という観点から、検討されるべき課題なのである。

最初に、子持ちの時期の雌を除き、雌雄の種個体はすべて単独生活者であるという種社会をとりあげてみよう。子はいずれ親離れして、独立した種個体―単独生活者―となる。これらの間では過去の関係は解消してしまっており、互いに独立の雄と雌として出会い、性交する。単独生活者である雄・雌間のメイティングは、適当に設定した調査域内の個体群全体として見れば、個体間の距離の遠近には関係するものの、いわばランダム・メイティングであろう。だから、ある雌雄間のメイティングがインセストであるか否かは、仮に観察者がすべての個体間の過去の血縁関係を記録し知悉しているとして、その観察者にとって意味をもつだけであって、当の個体たちが関知することではない。そしてそれは、調査域内のランダム・メイティングを行う個体群のなかに、生物学的血縁関係にある雄と雌の組み合わせが、どれほどのパーセントで存在するかという問題にすぎないであろう。ペア型の単位集団からなる種社会においても、このことは同様である。

複雄複雌の群れ型の単位集団からなる種社会においては、単位集団が半閉鎖系であるかぎり、すなわちオトナ個体の一方の性――ここではそれを雄とする――がすべて他の集団の出身であるような単位集団である場合には、しかも集団内の雌雄間での交尾はランダムにおこなわれるとすれば、生物学的な血縁としての父・娘間の交尾頻度と、血縁関係にない同程度の年齢差の雄・雌間の交尾頻度に、違いは見られないはずである。他方、母・息子および兄弟・姉妹については、相当する雄が集団から離脱してしまっている。それゆえ、単位集団における観察者から見てのインセストの頻度は、単独生活者からなる種社会でのインセストの確率と同程度かまたはより低いことはあっても、より高くなることはありえない。

動物一般の種社会は、単独生活能力をそなえた種個体を基本的要素としている。種社会はそうした独立の雌雄間のランダム・メイティングを通じて、次世代の種個体を再生産する。進化の過程において、両性から成りしかも通世代的に持続する集団を社会単位とする種社会が出現した。しかしそうした種社会においても、個々の単位集団は種社会内部の小さな部分構造なのであって、種社会にとって代わるような閉鎖系では本来ありえない。つまり、単位集団間には種個体の交流路がなんらかの形でそなわっているのであり、それは単位集団から成る種社会それ自体の基本的特性なのである。だから、血縁個体間の性交に着目して調査している観察者から見れば、単位集団からの一方または双方の性の個体の離脱は、「結果論的には」近親者との交配の機会を断絶するインセスト回避機構であるように見え、また見えてとうぜんなのである。ただし、単位集団を離脱する個体は、一方で血縁個体との交配の機会を断つと同時に、他方で当の集団内の非血縁個体との機会をも断つのである。

それゆえ、ある種の動物が観察者から見てインセストを回避しているのか否かという問題は、メイティングの可能性のある場に存在する雌雄たちの、観察データ中の非血縁個体間の交尾頻度に比べて、血縁個体間の交尾頻度が有意に低いのか、それとも有意差は見られないのか、という問題で

ある。結果が後者である場合には、観察者から見ての血縁個体どうしは、もはやそのような個体間関係を解消していて、独立の雄・雌としてふるまっていることになる。他方、もし有意に低かったならば、当の個体たち自身が相手の血縁個体を、同性の他の個体たちとは異なる存在として識別していることを意味する。そしてこの場合こそが、「かれらはインセストを回避している」、ということのできるケースなのである。このケースが実際に発見された顕著な事例が、ニホンザルの母・息子間での交尾回避であって、少数ながら成長後も生まれ育った単位集団にとどまっている雄について見られたのである。また、こうした雄は姉妹との交尾も回避していることが判明した。しかし、このような雄も結局は集団を離脱してしまうことがわかっている。

さらに伊谷は、高畑由紀夫による京都の嵐山の集団についての研究成果を、次のように紹介している。

> 高畑由紀夫はこの集団について詳細な性行動の分析をおこない、同時に近親婚回避の実態についての精密な資料を提示した。この研究の過程で、彼はある交尾期に頻繁に交尾を重ねた特定の雌雄が、それに続く非交尾期に特別に親密な関係を保つことを発見し、それを特異的近接関係（peculiar proximate relationship　PPRと略す）と呼んだ。ところがそのつぎの交尾期には、両者は性関係を避け、交尾は認められなかった。この非性的で親密な関係は両者が集団に共にいるかぎり続くと考えられている。そして高畑は、PPRが近親関係にある雌雄間に見られる関係に酷似していることを指摘しているのである。種社会の構造化に近親婚の回避が重要な役割を果たしているらしいということは、すでにお気づきのことと思うのだが、PPRの発見はおそらくこの問題の解明に光を投げかける重要な意味をもつものであったと私は考えている。
>
> （伊谷、『著作集』三、183）

これらのことは、血縁関係にあるかれら自身が相互に、相手を他の異性個体とは異なる特殊な関係にある個体と認知しており、それゆえに交尾を回避していることを意味する。高畑が明らかにした、ある時点からPPR関係に入った雄と雌が次の交尾期には性交を避けることも、観察者から見れば血縁関係ではないのだが、当事者はその時点から互いに、観察者がPPR関係と名づけたのに対応するある特殊な心理的関係にある異性と認知しはじめたことを示している。

## 13. 伊谷の「プレバンド・セオリー」について

それでは、われわれホモ・サピエンスに至る人類の系統はどのような単位集団を形成していたのであろうか。直立二足歩行を達成した初期人類は、大型類人猿たちとの共通祖先から分岐し進化してきた。現在の大型類人猿のうち、オランウータンは雌雄ともに単独生活者で単位集団をもたない。ゴリラは既述のような非母系の単雄複雌の単位集団をもつ。２種のチンパンジーは複雄複雌でかつ雌が集団間を移籍する父系の単位集団を形成している。「種社会の単位集団」という伊谷の理論に基づけば、最初の人類もなんらかの形態の単位集団を形成していたであろう。

既述のように伊谷は、ヒトニザル上科はペア型の単位集団の系譜を引く系統群であり、ヒト科の祖先をも含む大形類人猿の系統は、ペアの崩壊を経たのちにリオーガニゼーションの道をたどったのだと推定した。そして、ヒトにもっとも近いチンパンジーの単位集団を、人間社会の原型である狩猟採集民の社会のバンドと相同のものと位置づけて、以下のようなプレバンド説を提唱した。

> 私は、一九六六年にプレバンド・セオリーという仮説を提唱したことがある。ここでいうバンドとは、狩猟採集民社会の生活単位をなす居住集団を指している。すなわち、狩猟採集民のバン

ドとチンパンジーの単位集団とは相同の社会単位であり、両者の違いは前者が家族を内包するのに対して後者はそれをもたないという点にある。したがってこの考え方からすると、家族はヒトの基本的単位集団つまりバンドの下位構造だということになる。そしてここに問題になるのが、「配偶関係における独占の確立」なのである。　（伊谷、1983、『著作集』三、240-1）

既述のように今西は、人間の社会は家族をその構成単位としているという基本的な前提のもとに、まずサルの群れの原型である大きな群れの崩壊によって類人猿段階の小さな群れつまりファミロイド（類家族）が出現したと想定した。しかもファミロイドはすでにテリトリーを解消しており、相互に近隣関係で結ばれていると仮定したうえで、このファミロイドから人間の家族へと切り換わるプロセスを追求し、その一方で、これらの家族を構成単位とした集団（家族集団）が形成される過程を検討した。

それに対して伊谷は、むしろ逆に、ヒトあるいは初期人類の種社会の「単位集団」はチンパンジーのそれと同様の大きな群れであったと考え、家族はこのような単位集団の中にのちに形成された二次的な構造だと位置づけたのである。彼がプレバンド説を最初に唱えたときには、その内容はさほど明瞭ではなかったのだが、大型類人猿の単位集団の構造がしだいに明確になるにつれて、彼は今西の家族起源論の影響下から脱して、仮説としてのプレバンド説の内容を上記のように明確化したのである。

プレバンド説の要点は、ヒトの祖先または初期人類の社会の社会単位はプレバンドであって、家族はこの内部にのちに形成された下位構造である、つまり二次的な社会単位である、ということである。伊谷がプレバンド内での家族の析出過程をどのように考察したかを次に紹介するが、プレバンド説には、伊谷がさほど検討を加えていないもう一つの要点がある。それは、プレバンド内での家族の析出とともに、本来の社会単位としての単位集団であったプレバンドは家族集団としてのバンドに切り換わるわけだが、そのバンドは種社会の単位集団という性格を保持し続けるのか否か、否だとしたらバンド間の新たな関係のもとでバンド自体の構造と性格はどう変わるのか、という問題である。これについては次節以降で検討する。

初期人類の出現からわれわれホモ・サピエンスに至るまでには、およそ500万年にわたる進化の歴史がある。その途中の諸段階のヒトがどのような単位集団をもっていたのかは類推するしかないのだが、ヒト科にもっとも近縁のチンパンジーの単位集団と、私たちホモ・サピエンスの社会の原型である狩猟採集民の社会に見られる居住集団・バンドは、複雄複雌の構成で集団サイズも数10個体であるという点で類似している。その意味では双方の集団は相同の社会単位であり、進化史上の諸段階の人類もまた相同の社会単位を形成していたと考えられる。しかしその最後の段階であるホモ・サピエンスのバンドは、その内部に必ずしも一夫一妻とは限らないが、男女が持続的なペアを形成している点が異なっている。チンパンジーの単位集団に相同の集団がバンドの祖形だとすると、男女のペアとその子供からなる家族は、伊谷がいうようにヒト科の系統がもっていた基本的な単位集団つまりプレバンドの内部にその下位構造として形成されたのだと考えられる。すなわち、人類はさきにペア型の単位集団をつくり、のちにいくつかのペアつまり家族が集まって二次的な上位構造としてのバンドを形成したのではない、ということである。

伊谷は、ヒトの祖先たちの単位集団であるプレバンドの内部に配偶関係が生じてくるプロセスについて、チンパンジーの単位集団で「その前駆的現象とみなしてよいような観察がいくつか報告されている」と述べ、「特定のオスが特定のメスを囲い込むような行動をとり、他個体から離れて長期間にわたって配偶関係を持続しようとする行動」を紹介している（同上、241-2）。しかも単位集団内のオスたちの間には友好的な関係が成立している。そして、このような「チンパンジー社会よりも配偶関係確立の傾向がさらに昂まったという状況において、今西が‥‥‥重視した姦通（アダルトリー）の禁止という問題が、おそらく最初はインセストの場合同様、行動の回避、あるいはH.ク

ンマーのいうインヒビションといった形で現れてきたにちがいない」（同上、242）と彼は推測する。そしてさらに、集団内でのこのような「家族らしいものの析出と平行して、移籍するメスをめぐっての、集団内でのオスたちの権利の主張、交換の成立、そういった価値の授受を通じての原初的なコミュニティの外への拡張といった問題が展開してくるのであろう」（同上）と述べている。

彼のこの最後の部分の推測は、従来の人類学説とくにレヴィ=ストロースの、集団間での女性の交換による敵対関係の解消と親和的関係の創設という仮説になんとか繋げようとしたものである。しかしチンパンジーの単位集団は、伊谷自身がこの論文の259頁で指摘しているように、双方のオスどうしの闘争によって相手のオスを死に至らせ、一方の集団を消滅させるに至るほど相互に敵対的なのであって、この推論は木に竹を継ぐような観がある。そのためか、彼自身も「本稿はこのあたりでとどめておくことにしたい」としめくくっている。

従来の人類学説は、ヒトの祖先は集団を成して生活していたと考える。ただし集団どうしは対立しており、ゆえにそれぞれの集団は閉鎖系であって、集団内でメンバーの再生産を行っていた、つまり乱婚かまたは最強の男による女性の独占（フロイト）のいずれにせよ恒常的なインセストの状態にあった、と想定する。この前提に立ったうえで、われわれの祖先はいかにして集団間の対立を解消し、社会を構築することができたのかと問う。それは換言すれば、集団の閉鎖性の解除つまり集団間のメンバーの移動の確立、インセストの禁止と集団外婚（エクソガミー）、および男女間の配偶関係の確立と姦通の禁止による家族の形成の要因を問うことである。レヴィ=ストロースはそれを、人類史のある時点で男たちが自集団内のもっとも価値あるものである女性を互いに同時に断念し、彼女たちを集団間で「交換」するというある種の契約（規則、制度）をとり結ぶことによって解決したのだと推定した（レヴィ=ストロース、1977、『親族の基本構造』、第１～５章）。しかしこれは、近代市民社会の人間が創作した、人類の文化と社会の「起源神話」なのである。

## 14.　単位集団間の対立関係について

初期人類の単位集団もまた相互に対立的であったかもしれないが、にもかかわらず、他の霊長類の単位集団と同様に、集団間の個体の移籍を伴った「半閉鎖的」な集団であったことは疑いない。そして、集団間での個体の移籍は、「社会制度」としてのインセスト禁止や外婚制度とは無関係な、単位集団から成る種社会に備わった種の統一性にかかわる現象なのである。では、なぜ単位集団は相互に対立しているのか。マルクスの以下の考察は、このことを考えるための基礎を提供してくれる。

> 類生活は人間の場合でも獣の場合でも、身体的に一つには、人間が（獣と同じように）非有機的自然によって生きるところにあるのであって、人間が獣として普遍的であればあるほど、それだけ彼の生きる素（もと）である非有機的自然の範囲は普遍的である。
>
> ……中略……
>
> 肉体的に人間が生きるのは、ただこれらの自然産物――これらがいま食物、燃料、衣料、住い等々、どんなかたちであらわれるかは別として、――によってのみである。実践的には人間の普遍性は全自然を――それが（一）直接の生きる手段、すなわち食料であるという点でも、またそれが（二）彼の生活活動の材料、対象および道具であるという点でも――彼の非有機的身体たらしめるところの普遍性においてこそあらわれる。自然は人間の非有機的な体である。つまり、それ自体が人間の身体なのではないかぎりでの自然はそうなのである。人間は自然によって生きるということは、自然は彼の体であって、死なないために人間はこの体といつもいっしょにやっていかなければならぬということである。人間の肉体的および精神的生活が自然と繋がっているということは、

自然が自然自身と繋がっていることを意味するものにほかならない。けだし人間は自然の一部だからである。　（マルクス、「経済学・哲学手稿」、『マルクス・エンゲルス全集』40巻、436）

単独生活者たちの種社会では、それぞれの個体が周囲の自然を自らの「非有機的身体」として占有するとともに、それぞれが互いに相手の非有機的身体を認知し、相手の動きを気づかいながら直接の出会いを回避している。単位集団から成る種社会では、それぞれの単位集団が同様に自分たちの非有機的身体として自然環境の一画を占有している。こうした非有機的身体としての自然を、われわれは個体や単位集団の「テリトリー」と一般にいうのである。かれらの有機的身体の大きさが有限であるのと同様に、かれらの非有機的身体としてのテリトリーはある限度を超えてむやみに広がるものではない。ただし、個体や単位集団の棲息密度がなんらかの事情である限度以上に高くなれば、かれらの非有機的身体が互いに重なりあい、個体や集団間に争いが生じることになろう。人類はわれわれホモ・サピエンスに限っても、何万年にもわたって狩猟採集生活を営んできたし、その間の人口密度はきわめて低い状態にとどまっていたと考えられている。マルクスは上掲のように、人間は全自然をその非有機的身体とするに至った動物だと規定する。しかしこれは、個々の人間や狩猟採集民のバンドが自らの非有機的身体を空間的にどこまでも拡張するということではない。むしろ、彼らの生活空間を構成している自然環境のなかのすべての物に、フィジカルな生活と精神的な生活の両面において有用性と意味を見出すことができるようになった、ということである。われわれの祖先の集団も生活のためにある範囲の非有機的身体つまりテリトリーを有していたであろう。集団が互いに対立的だというのはこのような状態を意味するのであって、集団どうしがいつも闘いをくりかえしていたわけではけっしてないのである。

## 15. 配偶関係の確立と家族関係の持続

伊谷のプレバンド説によれば、ヒトのバンドの原型はチンパンジーの単位集団と同様に、男は自集団にとどまり、女が生まれ育った集団を出て別の集団に入るという父系の集団であった。つまり、ヒトの原初的集団も霊長類（にとどまらず哺乳類）各種の単位集団と同様に閉鎖系ではなかったという、霊長類社会の研究成果に立脚した仮説である。しかも、既述のように集団間での女性の移動は「インセストの禁止」とは無関係に行われており、インセストを回避するために集団を離脱するのでもない。単位集団内には血縁関係にある異性だけでなく非血縁の異性も存在するからである。

既述のようにニホンザルやチンパンジーは、母と息子、兄弟と姉妹は相互に相手を他の異性個体と識別しており、ニホンザルでは雄が、チンパンジーでは雌が成長後もまれに自集団にとどまっている場合には、母と息子、兄弟と姉妹は交尾を回避している。だが結局は、かれらもやはり自集団から離脱してしまう。さらにニホンザルの単位集団では、血縁個体間だけではなく、上記のようにPPR関係にある雄と雌も交尾を回避している。これは年周期的な発情期をもつニホンザルに特異的な現象なのか否か不明であるが、かれらが非血縁ではあるが親密な関係を形成した異性を他の個体たちと識別していることは確かである。成長が遅くオトナになるまで何年も要するかれらは、母と息子や兄弟と姉妹が集団内に共存しているかぎり相互の関係の絆を認知し続けている。また非血縁であれ互いに親密な関係で結ばれている個体間でも性交は回避される。こうした関係にある雌雄は、すでにオトナであるにもかかわらず、互いに自立的でインディペンデントな雄と雌として相対することができないという意味で、ある種のディペンデントな関係にあり、それはニホンザルやチンパンジーでは双方が集団内に共存するかぎり持続するのだが、その一方が集団を離脱する時点で解消されてしまうのであろう。

伊谷のプレバンド説に戻って、ヒトの祖先のある段階までは、彼らの種社会の単位集団はチンパ

ンジーの単位集団と相同の構造であったと仮定しよう。つまり女性が自分の生まれ育った集団を出て近隣の集団に入るのである。両者の違いは、集団の内部にその下位構造として、必ずしも一夫一妻とは限らないとしても、特定の男と女の間で配偶関係が確立しているか否かである。チンパンジーでは集団間のオトナの雄・雌間に上述のように「配偶関係の前期的現象」とみなしうるような観察例も報告されているが、基本的には乱交的状況にある。ヒト科の系統進化のある段階で、男女間の持続的配偶関係が確立したに違いないのだが、それがヒト化のかなり初期の段階で生じたのか、それともホモ属に至ってからのことなのかは不明である。

ともあれ、チンパンジーの単位集団と相同のヒトの集団において、成長した若い女性はこの集団を去る一方、よそから性的成熟に達した女性が集団に順次入ってくる。チンパンジーとの違いは、集団内の一人の男とこの移入してきた女が持続的なペアを形成するという点である。こうした配偶関係が確立すれば、以前からの母・子（母と息子・娘）と兄弟姉妹のみではく、父・子（父と息子・娘）の関係も形成され持続することになる。ペアの一方が死亡した場合には、残った他方はいわば再婚するであろうし、父または母の新たな配偶者と子どもは血縁ではないとはいえ、やはり親子という親密な関係を結ぶに違いない。要点は、このような持続的配偶関係の確立は、人類学者たちの既述のような起源神話とはまったく無関係に生じたのだということである。

ヘーゲルは男女間の結婚すなわち配偶関係の確立について、経済上の要因やその他の外的要因によって説明する考え方を退け、次のように述べている。

> §162　結婚の‥‥‥客観的な出発点は、二人の同意である。ここにいう同意は、二人が自然のままの個としての人格性を放棄して、一個の人格をなす、という同意であって、放棄という点からは自己制限といえるが、それによって二人が共同の意識を獲得するのだから、開放でもある。
>
> §163　結婚における共同体の倫理とは、結婚による統一を共同の目的として意識することに、つまり、愛し、信頼し、個人生活をまるごと共有することにある。そうした心がまえと現実のなかで、自然の衝動は、満たされればすぐに消えてしまうような、自然の要素の一つにすぎないものとなり、共同体の倫理にふさわしい精神の絆が、気まぐれな情熱や一時の偏愛を越えた、それ自体が解消不可能な絆として浮かびあがってくる。
>
> （ヘーゲル、長谷川宏訳、『法哲学講義』、656-7）

そして、こうした男女の統一性と一体性が独立の存在となったのが子どもなのであり、人間に独自の家族という共同体と、そのなかの夫婦、親子、きょうだいという関係の「解消不可能な」絆（倫理）が生じたのだ、ということである。このような状況は、ヒトの進化史のある時点で一挙に生じたというよりも、むしろ徐々に形成されたのであろう。

ニホンザルやチンパンジーでは、血縁個体相互間の関係認知は集団内にかれらが共存しているあいだは持続するが、一方が集団を離脱したその時点で、相手個体の不在化とともに関係も消失してしまう。あるいは逆に、かれらが性的に成熟して独立の雄・雌として行動するためには、集団を離脱することによって個体間のそれまでの関係を解消してしまうことが必要不可欠なのだとも考えられる。われわれの祖先もこうした道をたどってきたのであろう。ただし彼らは、その一方で上記のような男女間の持続的配偶関係をとり結ぶに至ったのである。そしてそれとともに、親と子および兄弟姉妹（きょうだい）という関係は、一方が集団を去って不在となり空間的に離れていても、解消することのない持続的な絆に変容したのだと考えられる。

## 16. 単位集団からバンドへ

それ以前は、娘や姉妹である女性が集団を離脱することによる不在化と、彼女の死による不在化は、他の個体たちにとって何の相違もなく、その不在化と同時にかれらの間に存在していた関係も消滅していた。かれらの個体間関係は、かれらの身体的共存と不可分でかつその範囲にとどまるものであった。子が未熟な間は、母と子の身体は分離していても相手を互いに自分の有機的身体の一部とみなしているので、一方の死は他方にとって異常な事態となる。しかし子が成長し身体的に独立するにしたがって、親と子はまさにそれぞれ独立の個体になり、一方の不在化は他方に影響を及ぼさなくなる。このような意味で、かれらにとってある個体の集団離脱による不在化と、その個体の死による不在化は同じことであって、単にその個体の姿が消えるだけであり、それとともにそれまでの個体間関係も消滅してしまうのだと考えられる。

他方、配偶関係を確立し集団内の下位構造として家族を形成するに至ったわれわれの祖先は、かつてのような相互の身体的共存と不可分でかつその範囲にとどまる関係性から、空間的に隔たっていようと長期にわたって持続する相互の関係性を獲得したのである。つまり、互いに相手が不在になっても、それによって相互の関係が消滅することなく、関係意識として存続するようになり、成長後の女性が自らの集団を去って他の集団に移籍したのちも、相互の関係は心的に潜在した状態で持続するようになったのである。このことは、換言すれば、彼らの相互関係において一方が不在であることと、その彼または彼女の死とは、違うこととして意識されるようになったのだともいえよう。

こうして、人間段階の親と子および兄弟姉妹という関係は、動物の親離れ・子離れによっていずれ消滅する関係とは異なる、人間に固有の関係のあり方となったのである。しかも、時間性と空間性を獲得したこの家族関係意識は、いまやかつての単位集団の枠を超えて、近隣の集団相互間に浸透し拡張しており、集団間にまたがるこうした家族関係が媒介となって、集団相互間というレベルでも新たに親和的な絆が形成されたのだと考えられる。この点が、動物の社会から人間の社会への進化において、いまだ種社会の単位集団という殻を脱していなかったプレバンドと、家族という下位構造が成立することによって新たに家族から構成される集団に変身したバンドとの決定的な違いである。つまり、バンドは、種に固有の構造の単位集団という縛りから解き放され、いくつもの家族が日々の生活を共にするという性格を保持しながらも、内部構成の自由度の高い集団に、変身したのである。

すでに人類以前の段階から、というよりも単位集団をもつ動物の種社会においては、単位集団間の種個体の交流路は確保されていた。ただし人類以前の単位集団は対立しあっていたのに対し、人間のバンドは対立関係を解消している点が異なっている。さらに、このことと相まって、バンドは一方の性の個体のみが種特異的に単位集団間を移籍する半閉鎖系ではなくなっており、男性も女性もバンド間を婚出、婚入しうるし、ペアとその子供からなる家族も双方のバンド間を移動することができる。そのため、どの家族もそれぞれの時点で見ればいずれかのバンドで暮らしているのだが、バンドの構成は長期間をつうじて見れば離合集散しているような外観を呈するのである。

つまり、人間社会の初期の形態は、バンド内にその下位構造としての家族が存在するとともに、親子と兄弟姉妹という「家族関係」のネットワークの広がりをとおして、開放系であるバンドの上位構造としての地域社会が形成されており、個々の家族はバンドを超えて広がるネットワークを介してバンド間を移動することができる、そのような社会である。ただし、バンド内の家族編成は長期的には離合集散により変化するものの、自然の中での狩猟と採集という時代における自立的な生計と生活の単位は、個々の家族というよりもむしろ、10前後の家族の総体としてのバンドであって、それはまさに日々の暮らしを共にする「生活共同体」なのである（丹野、2005）。

狩猟採集社会のような人口密度が希薄なままにとどまる社会では、個々の夫婦（この関係が長期

間持続するとはかぎらないことは現代社会と同様である）について見れば、子がいない（または生まれた子がすべて死んだ）という夫婦も少なからず存在するし、ある個人に“実の”兄弟や姉妹がいない（もともと一人っ子または他のきょうだいの死の結果としての一人っ子）という例もかなりの頻度で存在する。さらに“実の”親（の一方または双方）が死亡したという子供も存在する。にもかかわらず、彼らの「家族」関係は上記のような関係であり、“実子”のない夫婦にも「子供たち」がおり、だから彼らは「親」であり、“一人っ子”でも「兄弟や姉妹」がいるし、“実親”が死んだ子供にも「親」はいるのである。

こうして、個々人は親に対する子（息子や娘）として、兄弟に対する姉妹として、男（夫）に対する女（妻）、子に対する親（父や母）として、多様な関係を取り結ぶことになる。そして、これらの関係をとり結んでいる人びとの広がり、または彼らの関係の絆の広がりが、「家族」である。したがって、「家族」は本来、居住をともにしている実体としての「核家族」ではありえないし、“制度”に基づく“社会の単位”としての「集団」でもない。また、狩猟採集民のバンド（居住集団）は家族の絆で結ばれた人びとの集まりであるが、それは誰にとっても各人の家族全員の集まりであることはつねに不可能であり、誰にとってもつねに家族の一部の人びとの集まりなのであって、家族の他のメンバーは近隣のバンドに分散して存在する、そのような集団である。逆にいえばそれゆえに、自由に離れる（別の家族メンバーと共住する）ことも可能になったのである。

人間の家族とは以上のような、もともと制度や規則以前のという意味で“自然”に形成される人間関係の絆である。それゆえ、上記のような関係としての親と子や、兄弟と姉妹の間には、インセストは生じないのである。ただし、これは原則論上のことである。彼らの間にもまれにインセストが生じることはありうる。それは、別々のバンドで暮らしていた若い男女が出会ったとき、彼らがじつはきょうだいの関係であることを互いに知らないままに性関係を持ってしまうような場合である。このようなケースは当事者にとっては不可抗力の事態であろう。しかし、ある男女が親子やきょうだいだという関係は、その当事者にとってだけの関係なのではなく、彼らの近親者たち（の全員ではないとしても）もまた知っている関係なのである。だから、このような場合、彼らの近親者たちは彼らにお前たちはきょうだいなのだということを知らしめることになろう。彼らがすでに言語を有していたとすれば言葉でもって、もしそれ以前の段階であったとすれば何らかの方法でもって。つまり、彼らの間の「家族関係」は当人たちのみでなく、その周りの人びとも知っている関係なのであり、逆に言えば、ある男女の性交がインセストに当たるのか否かは、当人たちの判断にまかされることなのではなく、必然的に周りの人びとの判断を喚起することなのである。インセスト（近親性交）か否かということは当事者どうしだけではなく彼らと共に暮らしている人びとの関係認知によっているのである。

## 17. インセスト禁止と通世代的集団の編成：部族社会とクラン

したがって、インセストの禁止という制度は、本来人間社会に“普遍的”な制度ではない。人類学者がかってに、制度以前の段階で“自然に”性的関係を疎外している親子や兄弟姉妹をも、（暗黙の）制度に従っているのだと断定してきたのである。というのは、人類学者（に代表されるような人びと）が、親子や兄弟姉妹といえども男と女であることに変わりはないと内省的に考えるようになったとき、なにものにも拘束されないという意味で“自由”な（独立の）個々人にとっては彼らを性的な関係から除外すべき理由は存在しないとしたら、それは「集団」の意思に根拠をもつものに違いないと勘違いしてきたからである。

それではなぜ、多くの社会にインセストの禁止という制度やタブーが存在するのか。それは、上述のような社会よりもずっとのちの時代の社会が、通時的・通世代的に存続する「構造的な集団」

を編成する必要に迫られたからである。初期の社会にあっては、バンドの上位に形成されている社会はたんに地域社会だけであった。それは外延の輪郭を持たず、内部も構造化されておらず、広い地域にバンドがまばらに点在する状況を、それぞれのバンドの位置から空間的に捉えた関係の広がりとその濃淡を意味していた。このような状況の社会が、10万年以上のわれわれホモ・サピエンスの歴史の大半にわたって続いたのであろう。しかしその後、いわゆる部族社会が現われる。人びとは一つの部族の成員というアイデンティティをもち、部族どうしはそれぞれの領域をもって隣接することになる。部族社会といっても、人びとの日常生活の単位はかつてのバンドに相当する村々であるが、彼らは日常の生活共同体を超えて地縁的にあるいは非地縁的に世代間を通じて存続していく構造的な集団を編成し、こうした集団の連合体を部族として組織したのである。

通世代的に構造化された集団を形成するさいに、その“パン種”となったのは既述のような兄弟姉妹という関係であり、多くの人員を兄弟姉妹とすることによってこの集団の成員とするためには、彼らの間の性的関係を禁止しなければならなかった。こうして制度上の、つまり“インセストの禁止”に基づく“親子”と“兄弟姉妹”たちからなる政治的・経済的組織としての「集団」が形成された。しかしそれは、次世代の成員を自己再生産できない、自らそれを禁止した集団である。このような集団を通世代的に維持するためには、「集団」の外でつまり自集団のメンバーと他集団のメンバーとの間で再生産された人間を、いずれかの「集団」の成員として組み入れなければならない。人間を再生産することができるのは、“兄弟姉妹”ではない“男女”の対である。他方、いまやすべての男女は、いずれかの「集団」の成員として、つまり“兄弟姉妹”の集団であり“親族”から成る集団として組織された政治的・経済的集団の成員として、公的な立場も担わされた男女である。集団内の男女の性関係は禁じたものの、それ以外の男女間の関係は私的な領域として「集団」は関知せず、当の女性の子供はその「集団」が“姉妹”の子供として自集団の成員にするという方法をとるか、または男女間の関係をも双方の「集団」間の公的な関係として規制し、彼らの間に生まれた子供は当の男女が属するいずれか一方の集団の成員に組み込むという制度をつくることが、通時的集団編成とその成員確保のための必須条件であった。

一つの「集団」が形成されることは、同時にそれに対応するいくつもの「集団」が形成されることでもある。個々人は、私的な対人関係においては私的にふるまうことができるが、他方では、それぞれの「集団」の成員としての公的な立場に拘束されることになる。この公的な男女の関係を規制するのが、“インセスト・タブー”、“外婚”、“出自”といった「制度」である。それゆえ、通世代的な親族集団と制度は一体不可分に形成されたものであり、各集団は閉鎖的な自己再生産集団ではありえなかった。理念型として閉鎖系でありえたのは、それらの集団間の通婚関係の絆を一定の地域内で完結させることによって成立した社会、つまり「政治的統一体」としての社会であった。この種の社会が、モルガンが『古代社会』（1958,61）ではじめて明らかにした、いくつかの「クラン」から成る「部族」（tribe）という社会である。

## 文献

『増補版　今西錦司全集』第五、七、十二、十三巻、講談社、1993-94年
今西錦司、1951、人間以前の社会、上記の『全集』五、1-138
1957、霊長類研究グループの立場―ニホンザル研究の跡づけ―、『全集』七、80-99
1958、生物社会と人間社会、『全集』五、205-30
1961、人間家族の起源―プライマトロジーの立場から―、『全集』五、257-310
1976、霊長類社会の諸問題、『全集』十二、369-401
1987、群れ生活者たち、『全集』十三、403-20
『伊谷純一郎著作集』第三巻、平凡社、2008年
伊谷純一郎、1970、霊長類の近親交配回避機構、『著作集』三、19-27
1972、霊長類の社会構造、『著作集』三、29-163

1973、生物社会学・人類学からみた家族の起源、青山道夫ほか編『講座　家族　１、家族の歴史』、1-17、弘文堂
1974、『今西錦司全集』第七巻　解題、『著作集』三、204-222
1983、家族起源論の行方、『著作集』三、225-243
1986、霊長類社会構造の進化、『著作集』三、164-186
ヘーゲル、『法哲学講義』、長谷川宏訳、作品社、2000年
レヴィ=ストロース、『親族の基本構造』（上）、馬渕東一・田島節夫　監訳、番町書房、1977年
マルクス、「経済学・哲学手稿」、真下信一訳、『マルクス・エンゲルス全集』40、385-512、大月書店、1975年
モルガン、『古代社会』上・下、青山道夫訳、岩波文庫、1958,61年
丹野　正、2005、「シェアリング、贈与、交換－共同体、親交関係、社会」、『弘前大学大学院　地域社会研究科年報』第１号、63-80